2001年6月15日第3種郵便物認可　2016年5月1日発行（年4回2, 5, 8, 11月の1日）
通巻171号　ISSN 0910-7134

礼拝と音楽

a quarterly review of WORSHIP and MUSIC

No. 169
2016 SPRING

特集 礼拝とからだ

聖書の中の身体表現……辻学
司式者と会衆の動作・姿勢
——カトリック教会のミサを例に……宮越俊光
行列——旅する神の民のしるし
具体例の紹介とともにその霊性を探る……石井祥裕
礼拝の中の身体（からだ）の「居場所」……山本有紀
ラビリンスウォーク——歩きながらの祈りと黙想……武田光世
礼拝案——「からだ」で礼拝しよう……荒瀬牧彦　小栗献
Come, dance for our God!……編集部

日本キリスト教団出版局

特集◉礼拝とからだ

聖書の中の身体表現

辻学
広島大学大学院教授

礼拝における身体表現というテーマを見て、ふと考えてみた。日頃自分は、どのような身体表現を礼拝の中でしているだろうか、と。

礼拝の中では、立つ、座る、歌う、（交読文などを）音読する、（信仰告白などを）唱える、祈る、（説教や朗読を）じっと聴くといった動作をするが、これらはすべて身体表現である。

音楽や典礼関係の事柄は、筆者より適任な書き手に任せることにして、ここでは祈りや祝福といった行為に関係する身体表現について、聖書に遡って考えることにしよう。

手を合わせて祈る

礼拝の中で司式者から「祈りましょう」と言われると、ほとんどの人が自然に両手を組み合わせることだろう。私自身もそうしている。しかしこの、キリスト教の祈りの基本とも言えそうな動作は、聖書に由来するものではない。フランスの美術史家ルイ・レオは、『キリスト教美術の図像学』（Louis Réau, *Iconographie de l'art chrétien*, t. 1, 1955, p. 226）の中で、祈りにおいて手を組むという所作は、実際には比較的新しいものであり、「神の加護を祈るため、ユダヤ人も異教徒も、また初期キリスト教徒も、両手を天に向かって上げた」と述べているが、このことは、聖書本文によっても、また考古学的にも裏づけができる。

旧約聖書においても新約聖書においても、祈る時は、両手を開いて天に向ける姿勢をとるのが普通であり、我々がするような、両手を組み合わせる祈りは見られない。

出エジプト記には、モーセが「両手を広げて主に祈った」という描写が見られる（9・33）。歴代誌下によれば、ソロモン王はエルサレム神殿に「契約の箱」を安置するにあたり、主の祭壇の前に立つと、「イスラエルの全会衆の前でひざまずき、両手を天に伸ばして、祈った」とされる（6・13～14）。バビロン捕囚から帰還したイスラエルの民も、エズラが律法の書を開き、神をたたえると、「皆、両手を挙げて、『アーメン、アーメン』と唱和し、ひざまずき、顔を地に伏せて、主を礼拝した」とされる（ネヘミヤ8・6）。この祈り方が初期キリスト教にも受け継がれた

ことは、二世紀初頭に書かれたと考えられる第一テモテ書からわかる――「だから、わたしが望むのは、男は怒らず争わず、清い手（複数形）を上げてどこででも祈ることです」（2・8。ただし男だけがこのようにして祈ったわけではないだろう）。

アドルフ・ダイスマンの有名な『東方からの光』（Adolf Deißmann, *Licht vom Osten*, 4. Aufl., 1923）には、天に向かって挙げられた両手を描いた、復讐の祈りを刻んだ大理石碑が紹介されている（352頁。図版参照）。これは、紀元前一〇〇年頃のもので、エーゲ海の島であるリニア（Rheneia）から出たものだという。ヘレニズム時代のユダヤ人がこの地方にも離散して住んでいた事実を示すと共に、（古代オリエントおよび地中海世界で広くなされていた）両手を広げ、高く上げて祈る所作が（聖書的伝統にも合致するので）当時のユダヤ人に広まっていたことをうかがわせる、興味深い石碑である。

「復讐の祈り」の石碑図。

ローマにあるプリスキラのカタコンベに描かれた壁画（オランス像。三世紀後半）は、両手を上に挙げて祈る姿を示しており、キリスト教徒もこの姿勢で祈ったことが見て取れる。古代においては、祈る際にはこうして両手を開き、上に挙げていたのである。（なお、オランスと呼ばれるこの祈り方については、前号54頁以下で宮越俊光氏が詳しく述べておられるので併せて参照されたい。前述のオランス像も掲載されている。）

両手を挙げる仕草には、天からの神的な力を受けるという意味合いがおそらくあり、他人の頭にその手を置く按手（後述）は、その力を伝える所作ということになる。また、礼拝の最後に行われる祝祷では、両手を開き、高く上げる仕草がよく見られるが、これを祝福の所作だと考えれば（ルカ24・50～51で昇天直前のイエスが行なっている。ちなみに、上げているのは両手）、会衆の方を向いて行うことになるだろうが、祈りだと考えれば、天を仰ぐ方が趣旨に適っているとも言える。

一方、両手を組んだり合わせたりして祈る所作は、聖書の中には見られない。この所作が用いられるようになった経緯については確固たる説がないようだが（ラビ文献には、神の意思に対する無条件の服従を象徴的に表す所作として両手をすり合わせる祈りへの言及［後三世紀前半］がある［バビロニア・タルムード「シャッバト」10a。ビラーベックⅡ巻261～262頁参照］）、聖書に基づかない、しかしキリスト教の中で定着している「身体表現」の代表的なものであろう。

ひざまずく、ひれ伏す

カトリック教会では、二〇一五年六月に出された、日本カトリック司教協議会文書『新しい「ローマ・ミサ典礼書の総則」に基づく変更箇所』が、ミサ中にひざまずくことを禁じているように読めるというので議論になっているが、プロテスタントの場合は（もちろん全ての礼拝を見たわけではないけれども）、洗礼式で受洗者がひざまずく場合があるのと、メソジスト系の教会で「恵みの座」にひざまずく他は、礼拝の中でひざまずくことはほとんどないように思われる。

新約聖書の時代も、通常の祈りは立ってなされる慣習だったようである（マタ6・5、ルカ18・13参照）。「シェマー」と並ぶ、ユダヤ教の代表的な祈祷文である「十八祈祷文」は、紀元前一世紀～後一世紀にまで遡ると言われるが（長窪専三『古典ユダヤ教事典』教文館、二〇〇八年、240頁）、この祈りが「アミダー」（立っている、の意）とも呼ばれることは、この祈

りが立って朗唱されたことを示している。

しかし、特別な状況においては「ひざまずいて祈る」所作も見られる。ルカ福音書によれば、イエスはゲツセマネでの祈りに際して、ひざまずいて祈っている（ルカ22・41。なおマルコやマタイでは、イエスは地に伏して祈っており、「ひざまずいて」はルカによる改変）。使徒言行録では、ペトロがタビタを生き返らせるために、ひざまずいて祈っているし（9・40）、パウロは親しい人々との別れに際して、共にひざまずいて祈っている（20・36、21・5。フィリ2・10、エフェ3・14も参照）、ユダヤ人から石打ちを受けたステファノも、最後にひざまずいて祈願の言葉を発している（使7・60）。旧約でも同様に、ひざまずいて礼拝する場面が描かれている（代下29・29ほか）。

ルカ文書における描写とは異なり、パウロ自身は、ひざまずいての祈りに言及することがほとんどない。フィリピ2・10は、イザヤ45・23の援用だし、エフェソ3・14は、擬似パウロ書簡の用例なので、パウロ自身の言葉づかいではない。イエスにもパウロにもひざまずかせているルカは、ユダヤ人の祈りといえばこの姿勢だと考えているようである。

ひれ伏して拝礼するという所作も聖書には馴染みのものである。旧約における描写のほか（創17・3、17、民16・4、22ほか）、新約では、東方から来た博士たち（新共同訳は「占星術の学者」としているが、占星術師に限られるわけではない）が、幼子イエスの前でひれ伏し、拝んでいる（マタ2・11）。また、ヨハネ黙示録の中にも、ひれ伏して拝む所作が繰り返し出て来る（4・10、5・14、7・11ほか）。山上におけるイエスの変貌に接した弟子たちは、神の顕現に接してひれ伏している（マタ17・6。マルコの並行箇所にはこの描写はない）。神的存在の前でひれ伏するのは、旧約・ユダヤ教の伝統に限られた行為ではなく（ダニ2・46、Ⅰコリ14・25）、また神的存在に対してなされる他、君主の前でも服従のしるしとしてひれ伏した（前述の博士たちも、イエスを王として拝んでいる）。ひざまずく姿勢についても同様である（マコ15・18～19では、鞭打たれたイエスに向かって「ユダヤ人の王万歳」と嘲る兵士たちが、イエスに対してひざまずき、拝む真似をしている）。

ひざまずき、ひれ伏する礼拝姿勢は、神への恭順や服従を表現しており、イスラームで実践されていることは周知の通りだが、キリスト教の礼拝ではほとんど見ることがない。「イスラーム」が「絶対の服従」を意味することを考え合わせると、ひれ伏する礼拝姿勢はよく理解できる一方、キリスト教における神観には「絶対服従」という観念が弱いのかとも思わされる。前述した、カトリックのミサにおけるひざまずきの是非をめぐる議論も、このことと関係するだろうか。

手を置く（按手）

両手を上げる祈りのところでも少し触れたが、他人の頭に手を置く所作も、礼拝の中で見られる身体表現である。ちなみに按手は、両手の場合も片手の場合もあるが、新約聖書では常に両手でなされている（新共同訳は単に「手」としか訳していない）。

「按手」というと、キリスト教会においては職位の授与式（叙階、叙任）が連想されるが、この行為が意味するところは広く、「人または物の上に手を置くか差し伸べるかして、聖霊の働きや祝福を伝達・授与する行為」一般を指している（『岩波キリスト教辞典』、二〇〇二年、57頁）。

手を置くという行為は、新約聖書にたびたび見られるが、大別すると次のような意味合いを持っている（分類は A. Hanson, *TRE* 14, S. 418-421 などを参照した）。いずれの場合にも、手を置かれた人に神の霊が臨んで働くことを象徴的に示すという基本的な意味は共通しているが、礼拝の中でなされる「按手」としてはとくに②③④が見られる。

①癒し（例、マコ5・23、6・5、使9・12、28・8）。

②洗礼と結びついた行為。聖霊がその人に下るために行われる（例、使8・14～17、19・1～7）。
③祝福（例、マコ10・16。創48・14～15参照）。
④教会の特定の務めへの任命（例、使6・6、13・3、Ⅰテモ5・22。民27・18、申34・9参照）。

洗礼に伴う按手については、使徒言行録に興味深い記述が見られる。19・1以下によると、エフェソには「ヨハネの洗礼」しか知らず、聖霊があるかどうか、聞いたこともないという信者たちがいた。この人たちが、「主イエスの名に至る」（直訳）洗礼を受けた後、パウロが彼らの上に手を置くと、聖霊が下ったというのである。直前の18・24～28には、アレクサンドリア出身の伝道者アポロがエフェソで活動したことが記されているが、このアポロもまた、「ヨハネの洗礼しか知らなかった」という（18・25）。とすると、19・1以下に登場する人々は、アポロの伝道によって「弟子」となった可能性が十分考えられる。それに対してパウロは、「イエスの名に至る」洗礼を宣べ伝えていたという。

だが、「イエスの名に至る洗礼」だけでは聖霊降臨の条件としては十分でなかったようである。9・14以下によると、エルサレムにおける大迫害（8・1b～3）の結果サマリアに移住したフィリポがその地で伝道活動を展開した結果、サマリアに信者が増えた。ところが、この人々は「主イエスの名に至る洗礼」を受けていたにもかかわらず、「聖霊はまだだれの上にも降っていなかった」というのである。そこで、エルサレムからペトロとヨハネとが来て、按手を行うと、サマリアの信者たちは聖霊を受けた（9・16～17）。

エフェソとサマリアの信者たちにはなぜ聖霊が下らなかったのだろうか。表面的に見ると、洗礼に続く按手が行われなかったためだという印象を受ける。エフェソではパウロが、そしてサマリアではペトロとヨハネとが手を置いたことで初めて聖霊が下ったからである。

だが、この背後にあるのは、エルサレム教会による洗礼の「ブランド化」ではないかという気がする。アポロやフィリポによる洗礼では不十分であって、エルサレム教会（とその権威を尊重していたパウロ）による洗礼（あるいはその承認）でなければ、聖霊は下らないという仕方でエルサレム教会は、「聖霊の下る洗礼」の専有と正統化、そして自らの権威づけを図ったのではないだろうか。「聖霊と火による洗礼」の到来を予言した洗礼者ヨハネの言葉（マタ3・11＝ルカ3・16）はその根拠として用いられ得たはずだし、イエス自身が受洗した時に聖霊が下ったという「聖伝」（マコ1・9～11並行）は、受洗時における「霊」の授与の原型として（エルサレム教会の人々によって）脚色されたものであろう。

この推測が当たっていれば、按手には洗礼の正統性を保証する意味合いがあることになる。聖霊が下る洗礼こそが本物なのであり、それは正統な教会の役職者によってなされた場合にのみ可能だというわけである。

正統性の保証という意味合いは、任職の按手にも当てはまる。この慣習は旧約に遡る。ヨシュアの任職は民27・18～23で語られているが、申34・9ではこう言われている。「ヌンの子ヨシュアは知恵の霊に満ちていた。モーセが彼の上に手を置いたからである」。ここでもすでに、「霊」が正統性の保証として機能していることが見て取れる（王下2・9では、預言者エリヤの後継者エリシャが、エリヤにこう願っている。「あなたの霊の二つの分をわたしに受け継がせてください」。ただしエリシャへの按手は描かれていない）。新約でも、「聖霊に満ちた」ステファノたちが、使徒たちから「食卓に奉仕するため」按手を受けている（使6・5～6）。また、アンティオキアの指導者たちは、パウロとバルナバを伝道旅行に送り出すよう聖霊から告げられたため、二人に按手を施した上、送り出したという（使13・3）。

これらの按手に、任務の正統性を裏づけるという意味合いを見て取ることは難しくない。

聖霊の臨在と働きが伴うための按手が同時に、按手を受ける者の「正統性」を示すとすれば、後代の教会が叙階（叙聖）を使徒継承の概念と結びつけ、その際に按手を行うようになったことは、按手の持つ意味合いに適ったものということになるだろう。正統性の表現という点は、使徒継承を謳わないプロテスタントの按手礼もあまり違わないように思う。

口づけによる挨拶

聖書で命じられてはいるが、実践しづらい所作の代表が、この口づけによる挨拶だろう。パウロはⅠコリ16・20でこう命じている。「聖なる口づけによって互いに挨拶を交わしなさい」。同様の勧告は、初期の手紙である第一テサロニケ書でも（5・26）、また後期の手紙であるローマ書でも（16・16）なされているから（Ⅱコリ13・12、またⅠペト5・14も参照）、口づけによる挨拶は、慣習的なものだったようである。パウロが詳細な説明を加えていないことも、これが広く知られた所作だったことを示している。パウロにとって未踏の地であったローマの諸教会でも行われていたのだから、パウロ自身が定めた慣習でもないようである。

口づけするという行為自体が普通に行われる文化がないと、このような挨拶は定着しないはずである。実際、古代ギリシアにおいては、近親者や友人の間で、また客人に対して口づけする慣習が古くからあった。また、オリエントに由来する慣習として、支配者を敬うしるしとして口づけすることも広まっていた。口づけは、頬や額、また目や肩、手にされたが、性愛的な意味での口づけが後に広まると、口にされるようにもなった。通常の口づけは、出会いや別れの挨拶として、また協定締結や和解の際にもなされ、とりわけ歓迎の挨拶としての口づけは、オリエントでもギリシア・ローマ世界でも広くなされていたようである（G. Stählin, *ThWNT* IV, S. 118-122による）。ちなみに、新共同訳が「拝む」と訳している動詞 proskynein は元来、「～に口づけする」という意味で、前述の通り支配者に対して、また神像などに対して口づけしたことから、「敬意を示す」ないし「拝む」という意味で（実際には口づけをしなくても）用いられるようになった（マタ2・11、4・9、14・33ほか多数）。

パウロが命じている「聖なる口づけ」も、このような、信者同士の挨拶を指しているものと思われる。「聖なる」という形容詞は、儀式的な意味合いというより、「聖なる者」＝信者同士でなされることを指しているのだろう。パウロより後代に書かれたⅠペトロ書ではこれが「愛の口づけ」と表現されていることも（5・14）、「聖なる」に特別な意味がないことを示唆しているように思う。教会の集会に集う人々はこのようにして、相互に親愛の情を表現し、結びつきを強めたのである。

この「聖なる口づけ」は、現代の教会に「平和の挨拶」として受け継がれているようである。カトリックや聖公会ではよく知られているようだし、私がこれまで出席した日本キリスト教団の教会でも、礼拝の中あるいは最後で、前後左右の人たちと「平和の挨拶」を交わし、握手するところがあった。個人的には、いささか気恥ずかしいのだけれど。

身体表現というのは、文化と結びついたものなので、聖書に記されている所作をそのまま実践できない場合はもちろんあるし、逆に、日本の文化に結びついた表現を導入することも大いにあって良いと思う。大事なのは、聖書の示す身体表現が意味するところを汲み取ることである。

（つじ・まなぶ）